

◆ 今週のコメント

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が1例(女性, 20歳代)あります。型別はO157(VT1VT2)です。本年初めての報告となっています。
詳細は下記ホームページをご覧ください。
○京都市感染症情報センターホームページ「腸管出血性大腸菌感染症発生状況」
<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000068305.html>

◆ 今週のトピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は、23.44(1,594例)で、第5週(1月27日～2月2日)をピークに2週連続で減少しています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- 三類: 腸管出血性大腸菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 1例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	23.44	1594
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	5.76	236
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.85	35
	③ 水痘	0.46	19
	④ 突発性発しん	0.17	7
	⑤ 咽頭結膜熱	0.10	4
眼科	流行性角結膜炎	1.00	10

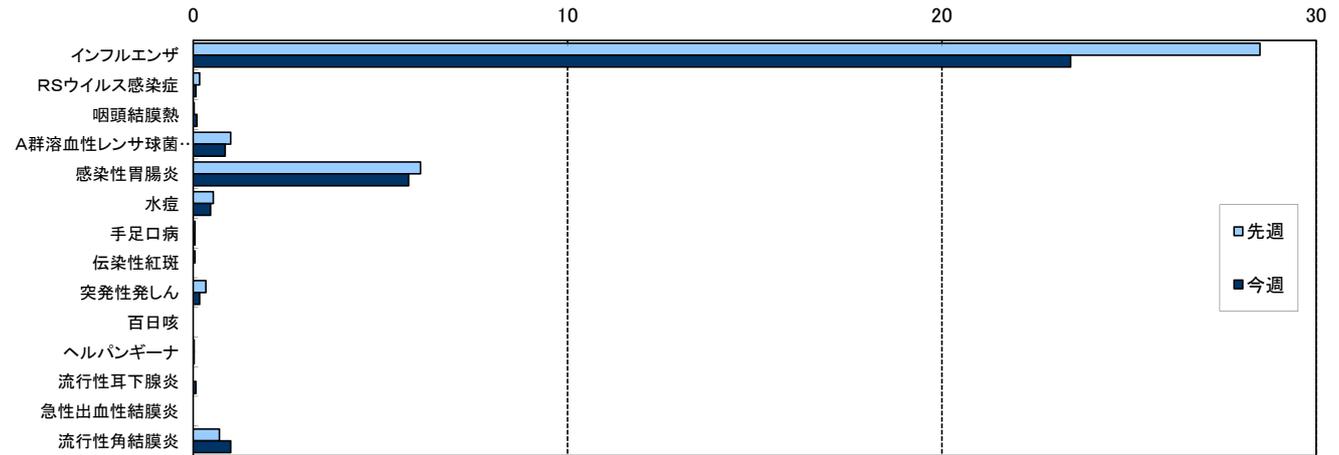
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <インフルエンザ>

(注) 京都市のデータは、平成26年2月20日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

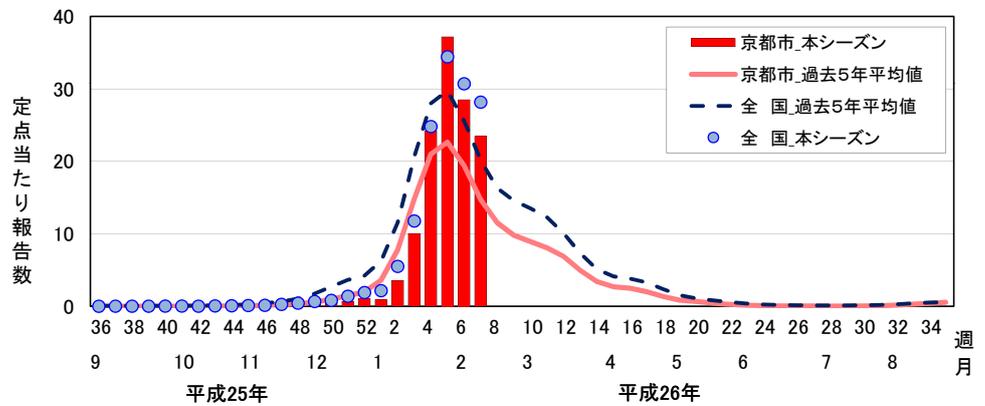
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第7週)と先週(第6週)の定点当たり報告数の比較



2 インフルエンザの推移

週	報告数(例)
第3週	683
第4週	1646
第5週	2529
第6週	1938
第7週	1594
累積報告数 (第36週以降)	8912

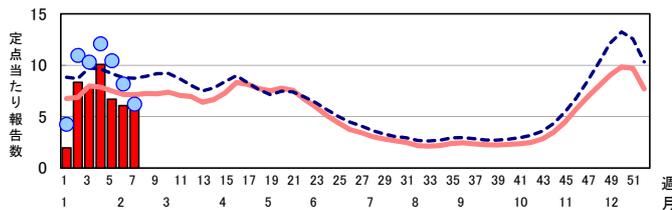


※平成21年/22年シーズンは、例年と流行傾向が大きく異なるため、過去5年平均値の算出には使用していません。

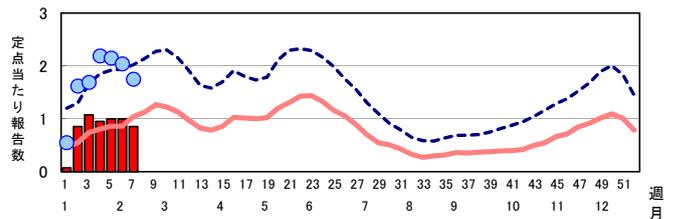
3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>

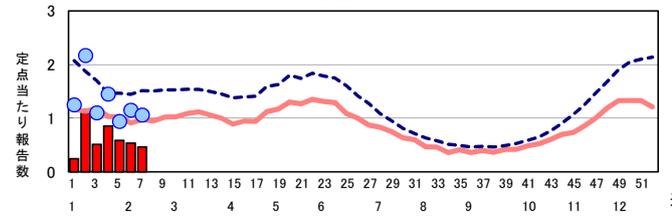
1 感染性胃腸炎



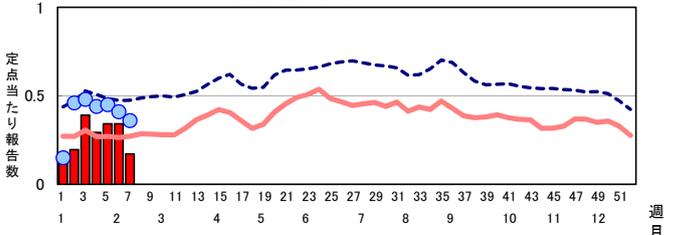
2 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎



3 水痘

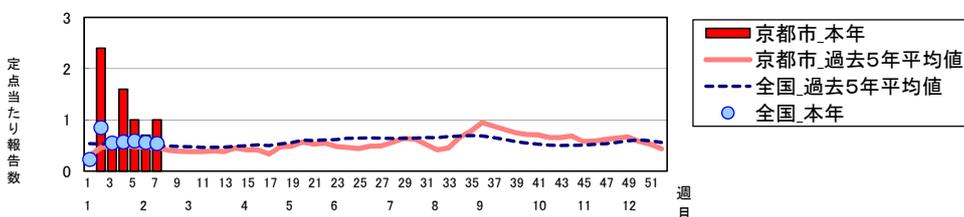


4 突発性発しん



<眼科定点>

流行性角結膜炎



第7週(2月10日～2月16日)トピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は、23.44(1,594例)で、第5週(1月27日～2月2日)をピークに2週連続で減少しています。

行政区別にみると、東山区、伏見区を除く9行政区で前週よりも減少していますが、依然として、3行政区(左京区、南区、西京区)において、警報レベルの「30」を上回っています。近畿6府県では、全ての府県で減少しています。

京都市衛生環境研究所では、今シーズンに、AH1pdm09を18例、AH3型を2例、B型を14例、分離・検出しています。

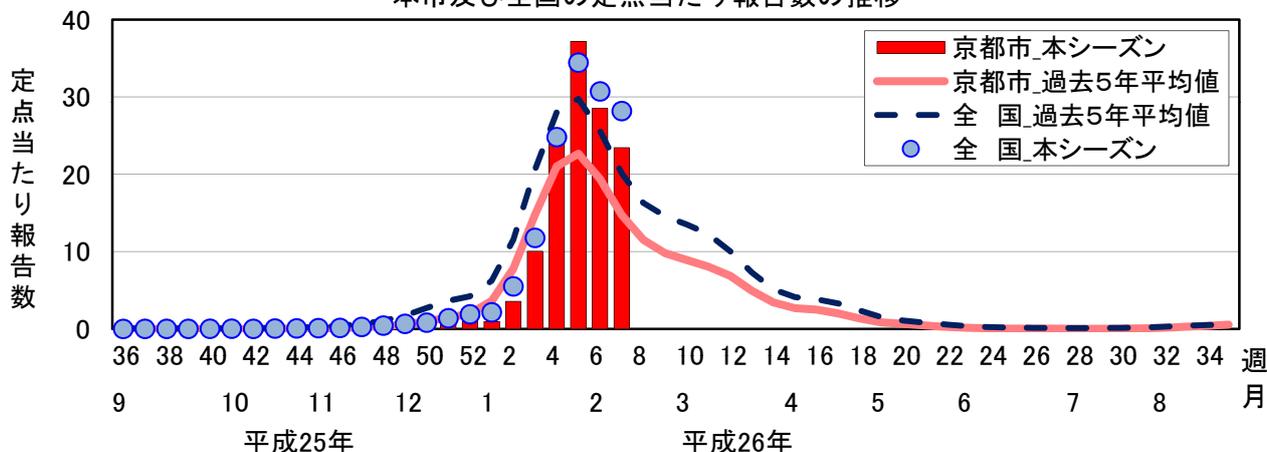
全国のインフルエンザウイルス分離・検出報告数は、AH1pdm09 1166例(44.6%)、AH3型 808例(30.9%)、B型639例(24.5%)となっており、平成21年/22年シーズンに新型インフルエンザとして流行したAH1pdm09の分離・検出割合が最も高くなっています。(平成26年2月20日現在)

また、国立感染症研究所と全国の地方衛生研究所が共同で、インフルエンザウイルスの抗インフルエンザ薬耐性株サーベイランスを実施しています。詳細は、下記ホームページをご覧ください。

○国立感染症研究所感染症疫学センターホームページ「インフルエンザウイルス分離・検出速報」

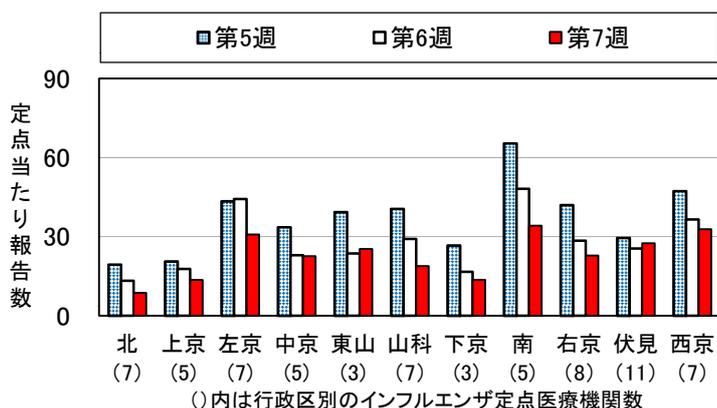
<http://www.nih.go.jp/niid/ja/iasr-inf.html>

本市及び全国の定点当たり報告数の推移

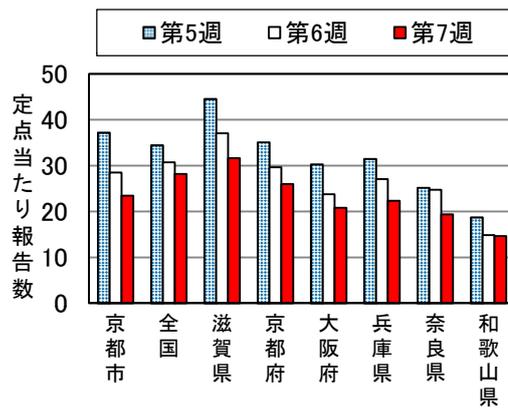


※平成21年/22年シーズンは、例年と流行傾向が大きく異なるため、過去5年平均値の算出には使用していません。

本市の行政区別定点当たり報告数の推移



近畿6府県の定点当たり報告数の推移



全国のインフルエンザウイルス分離・検出数の推移

